

聴く力を生かした歌唱指導

～豊かな音楽性と表現力を育む音楽科授業をめざして～

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル

長岡 知里

1 はじめに

学習指導要領の音楽科の目標の中核に、「豊かな情操を養う」という文言があるように、音楽科における教育活動は、児童の「心の教育」に大きく寄与していると考えられる。音楽は本来、私たちの心を豊かにしてくれるものであり、学校における音楽的な活動では、集団で声や音を合わせて、協同する喜びや感動体験を共有することができる。そこでは、豊かな音楽性を育み、仲間とのつながりを深めることができる。私は、この音楽教育の特性を生かし、豊かな音楽性と自己表現力をもち、心豊かに生活できる児童を育てていきたいと願っている。この願いを実現するためには、児童が自らの感性を働かせ、進んで音楽にかかわり、音楽活動の楽しさを味わうとともに、自らの思いを音楽で表現できる力を培っていく必要があると考えている。

2 実践研究主題の設定と経緯

(1) 自分の思いが生きる歌唱表現をめざして

ー前任校・名古屋市立S中学校での実践からー

楽曲に対する自分の思いを表現に生かすことができるよう、「感じる」「広げる」「深める」の3つの場面で構成する基本的な学習過程を設定した(2003長岡 図1)。この実践から、次のような成果が明らかとなった。

- 「広げる」の場面では、ペアやグループで取り組ませることにより、互いの思いや感動を共有することができ、音楽的な感性を広げていくことに役立った。
- 「深める」の場面では、表現を振り返る場を学習過程に位置付け、友達のよさや問題点を評価させたことは、自分の表現を見直し、さらに伸ばす点や修正すべき点を明らかにするのに役立った。

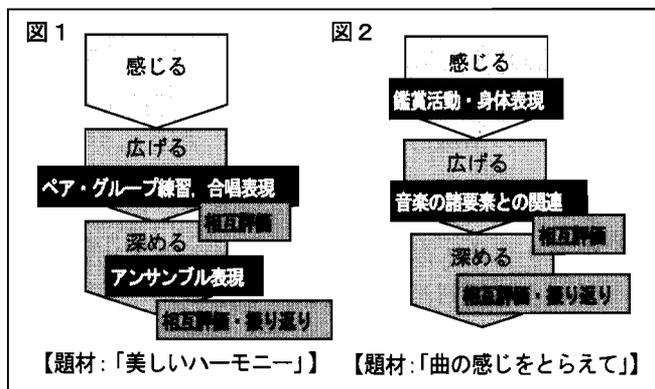
しかし、「感じる」場面では、時間的な制約もあり、楽曲の特徴や仕組みについて感じ取らせることが必ずしも十分とは言えなかった。音楽表現の力をさらに伸ばすためには、「感じる」場面を充実させ、自分の中に取り入れたものを「広げる」の表現活動で再現させることによって、生徒自身が成長の実感をもてるようにすることが大切であることが分かった。

(2) 感性を引き出す鑑賞活動の工夫

ー現任校・名古屋市立O小学校での実践からー

中学校での経験をもとに、音楽との出会いを大切にし、感じ取ったものを自らの表現へと生かすことができる児童の育成を目指して実践を行った。「感じる」の場面では、聴く観点を明確にした鑑賞活動や楽曲の特徴を感じ取らせる身体表現を取り入れ、積極的にそのよさや美しさを感じ取り、表現活動へと生かすことができるようにした。また、「広げる」の場面では「曲に合った声の出し方」「音程」「主旋律と副旋律とのバランス」など、鑑賞活動で聴き取った観点から歌い方を相互評価する場を設定し、その結果を、技能練習に生かすことができるようにした(図2)。鑑賞活動の工夫や、観点を明確にして評価し合い、自分の技能の向上へと生かす場を設けたこの実践から、次のような成果が明らかになった。

- 楽曲との出会わせ方の工夫により、音楽に固有の雰囲気や気分、味わいを感じ取らせることができた。
 - 音楽の要素に結び付けた表現を相互評価することにより、技能の向上につながった。
- しかし、「こんなふうに歌いたい」という思いはあっても、歌唱表現における「自分の表現したいことをふさわしい方法で表現できる力」が身に付いていないために、限られた時間の中で達成感を味わうまでに至らない児童がいた。そのため、小学校での個々の技能的問題点に対する具体的な支援の方策や、基礎的な音楽的知識と表現力を着実に身に付けさせる系統的な活動が必要だと考えられた。



(3) 小中学校の実践を通して見えてきたもの

音楽科の授業は、指導者の個人的な考え、関心に偏って実践されたり、「楽しく歌う（演奏する）」という音楽科の指導の初歩的な側面にとどまったりしているのでは不十分である。「こう表現したい」「どんな声（音）を出すとよいか」などの自らの思いを実現させる力を養うこと、つまり、「音楽的に思いを伝える表現力を身に付ける」ということが必要である。本研究の目的は、前述の「豊かな情操を養う」という音楽科の目標に迫るために、「楽しく歌う（演奏する）」という心情を大切にすることで、研究主題を「聴く力を生かした歌唱指導 ～豊かな音楽性と表現力を育む音楽科授業をめざして～」と設定し、表現領域から歌唱表現を取り上げ、実践を通して検証していく。

(4) 音楽科における「聴く力」とは

音楽活動は、自分の思いを音や音楽を通して伝え合う活動であり、音楽によるコミュニケーションともいえる。コミュニケーションには、自らの思いを伝えるだけでなく、相手の思いを「聞く（聴く）」という双方のやりとりが大切であるように、音楽における表現力を高めるには「聴く力」を高めることが重要である。音楽科で「聴く」とは、次に示す4点の活動であると考えられる。

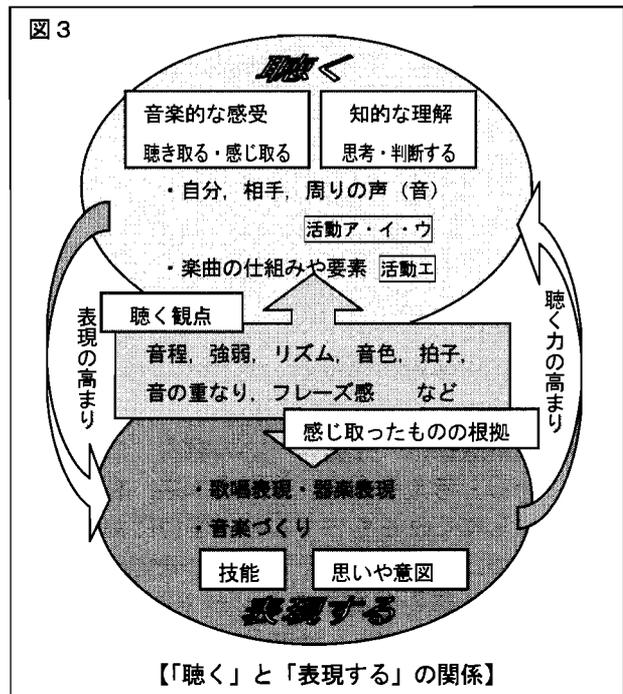
活動ア	自分の出す声や音を聴き、技能の状況を知ること。
活動イ	相手の出す声や音を聴き、演奏の意図に気付いたりよさを認めたりすること。
活動ウ	周りの声や音を聴き、自分の役割を知って積極的に活動に参加すること。
活動エ	楽曲から聴き取ったり感じ取ったりした音楽の仕組みや要素を、音楽や言葉などで表現すること。

また、そのためには「音程」「強弱」「リズム」などの聴く観点を明確にし、感じ取ったものの根拠となるものは何かを判断できることも必要である（図3）。この大切さについては、次項に述べる新学習指導要領にも示されている。

3 新学習指導要領から —なぜ、「聴く力」なのか—

(1) 【共通事項】の新設

音楽科授業で取り扱う活動は、表現及び鑑賞の二つの領域に分けられるが、現状では表現活動が強調され、鑑賞活動の位置付けや工夫が必ずしも十分ではないという傾向が見られる。表現力を高めるためには、「聴く力」を高めることのできる鑑賞活動も大切にしたい。今回の学習指導要領の改訂では、「音楽を特徴付けている諸要素」や「音楽の仕組み」が、【共通事項】とし



て新設された。新学習指導要領では、この音楽を特徴付けている要素や仕組みに着目させ、それらの働きが生み出す特質や雰囲気表現及び鑑賞の領域を横断して感受させることが求められている。それぞれの事項は授業の中でより明確に意識され、題材全体を通してさまざまな活動の基盤となっていく。つまり、これからの授業では、楽曲のおもしろさやよさ、美しさがどのようにしてつくられているのかなど、音楽を構造的に聴き理解する鑑賞活動を展開し、感じ取ったことを積極的に表現に生かせるようになると期待される。

(2) 音楽科における言語活動

新学習指導要領では、全ての教科で「言語活動の充実」が求められている。私は、言語力とは、思考力や想像力、そして、それらを適切に表す言葉の能力を意味しているのとらえている。音楽科では、「このように歌いたい（演奏したい）」という表現に対する自分の思いや意図を明確にもって活動を進めることが大切であり、そのために必要な言語力は以下のものがあると考えた。

- ・音楽を聴いたり感じ取ったりしたことを、言語化して表現する力。
- ・自分の思いや意図を他者と共有し、演奏表現に生かすためのコミュニケーション力。
- ・音楽のよさや美しさを、音楽を特徴付けている要素や仕組みなどの関係から言語で説明する力。

言語活動を充実させることで、児童が根拠をもって表現の工夫ができるようになる。それとともに、「聴く力」を高めることが、表現力を高めることにつながっていくと考えられる。

(3) 豊かな「音楽性」と「表現力」とは

学習指導要領解説音楽科編 p.8 教科の目標 1(2)イによると、「音楽に対する感性」とは、音楽的な刺激に対する反応、すなわち、「音楽的な感受性」ととらえられている。また、この「音楽的な感受性」とは、音楽を感覚的に受容して得られる、リズム感、旋律感、和声感、強弱感、速度感、音色感などであると示されており、これらが表現や鑑賞の活動の根底に大きくかかわるものとなる。

音楽科における「表現力」とは、感じ取ったり聴いたりしたことを、思いや意図をもって表現する力を示す。思いや意図とは、児童が音楽とのかかわりを深めていく過程で、「どう表現したらよいか」「自分はこのように歌いたい」「曲風に合う声の出し方はどれか」「みんなで響きを合わせるにはこのように声を出すとよい」など、心の中に培ったイメージやよりよく表現したいという願いであり、その根拠となるものが前項で示した〔共通事項〕となる。

実践を進めていくこととする。

音楽を構造的に聴き理解する鑑賞活動を展開し、感じ取ったことを歌唱表現へと生かすことができる指導の在り方を追究する。

また、研究の仮説を次のように立て、実践を通して検証していく。

音楽の要素や仕組みを感じ取ったり、聴き取ったりする活動や、各領域に言語活動を取り入れた授業を構成することで、豊かな音楽性と表現力を育むことができるだろう。

(2) 基本的な学習過程

これまでの実践から、「感じる」「広げる」「深める」の学習過程を踏襲する。さらに、題材全体を通して、〔共通事項〕として示される音楽を特徴付けている要素や仕組みに着目させ、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を受容し、表現に生かすことができるようにする(図4)。また、音楽を特徴付けている要素や仕組みは、「音楽のひみつカード」としてキーワード化して提示し、次のような段階で取り入れる(表1)。

4 研究の概要

(1) 研究のねらいと仮説

本研究主題「聴く力を生かした歌唱指導 ～豊かな音楽性と表現力を育む音楽科授業をめざして～」に沿って、研究のねらいを以下のようにし、

5 研究の方法

(1) 対象児童の学校の実態

現任校である名古屋市立〇小学校は、守山区に位置し、特別支援学級2学級を含めた18学級の

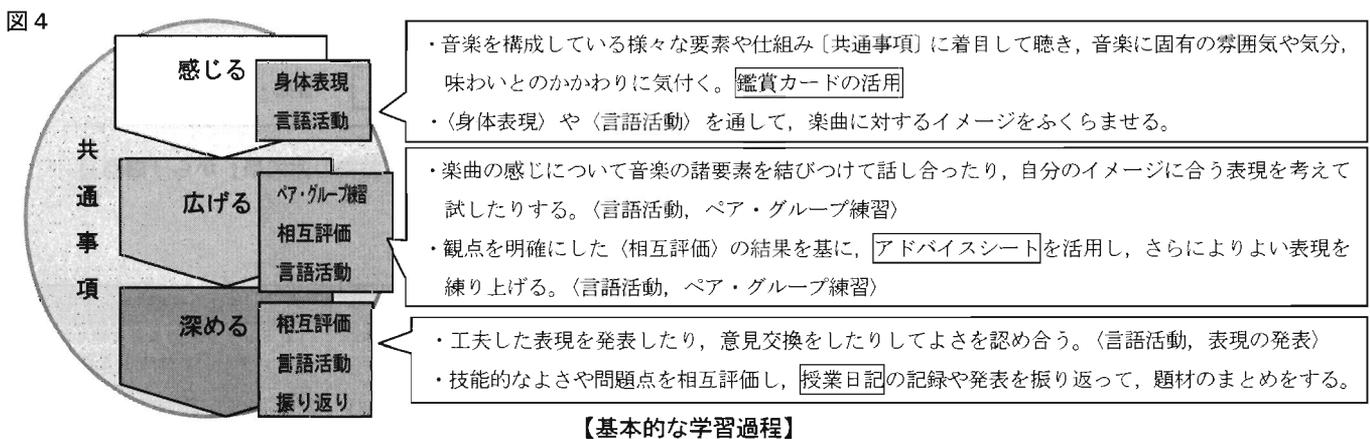
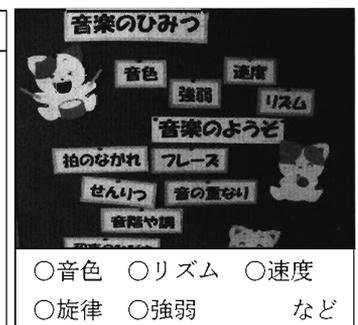


表1

低学年	中学年	高学年
教師が示した「音楽のひみつカード」に着目して聴く。想像したことや感じ取ったことを、音楽や言葉などで表して、楽曲や演奏の楽しさに気付く。	教師が示した「音楽のひみつカード」の中から、楽曲の雰囲気や自分のイメージと結びつけて聴く。想像したことや感じ取ったことを、音楽や言葉などで表して、楽曲の特徴や演奏のよさに気付く。	楽曲の雰囲気や自分のイメージの根拠となる「音楽のひみつカード」を選び、曲想やその変化を感じ取って聴く。想像したことや感じ取ったことを、音楽や言葉などで表して、楽曲の特徴や演奏のよさを理解する。



【〔共通事項〕の提示の仕方と「音楽のひみつカード」】

中規模校である。小学校の特性として、音楽科では6年間を見通した継続した指導がしにくい。そのため、このような現状からも、学級担任や非常勤講師が継続して指導にあたることのできるような、「聴く力」を育てるためのカリキュラムの必要性を感じる。

(2) 仮説の具体化

3 (4) で述べた次の「聴く」活動を取り入れ、平成21・22年度の2か年で実践を行う。

- 活動ア** 自分の出す声や音を聴き、技能の状況を知ること。
- 活動イ** 相手の出す声や音を聴き、演奏の意図に気付いたりをよさを認めたりすること。
- 活動ウ** 周りの声や音を聴き、自分の役割を知って積極的に活動に参加すること。
- 活動エ** 楽曲から聴き取ったり感じ取ったりした音楽の仕組みや要素を、音楽や言葉などで表現すること。

○「[共通事項] を基盤とした題材構成の実践例」
3年 題材「様子を思い浮かべて」(21年度)

- ・表現の発表 **活動ア・イ**
- ・グループ活動 **活動ア・イ・ウ**
- ・鑑賞カード、コレオグラフィー **活動エ**

○「ハーモニー感を育てる段階的な歌唱指導」

4年 題材「歌うの大すき」(22年度)

- ・録音、「ア」母音唱 **活動ア**
- ・和音唱、パートナーソング、サイレント・シンキング、表現の発表 **活動ア・イ**
- ・グループ活動、合唱表現 **活動ウ**
- ・身体表現 **活動エ**

○「[共通事項] に着目して分析的に聴く活動」

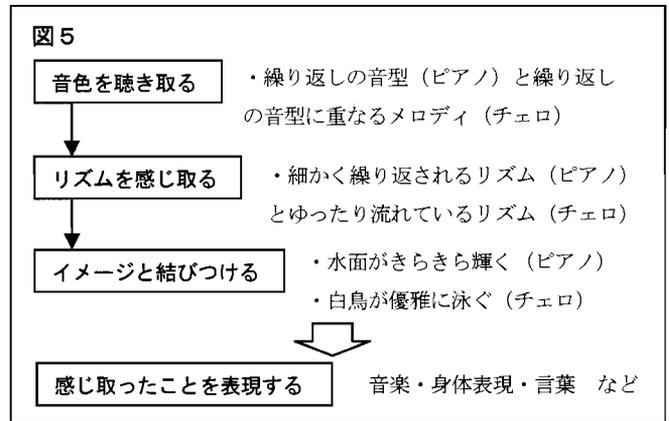
4年 題材「ふしとリズム」(22年度)

- ・合唱奏 **活動ア・イ・ウ**
- ・鑑賞カード、手拍子や足ぶみ、指揮 **活動エ**

(3) 「聴き方」の指導例(組曲「動物の謝肉祭」)

初めに、楽器の「音色」について聴き取ることからねらいとして鑑賞させ、その際、「繰り返しの音型」を演奏する楽器と「繰り返しの音型に重なるメロディ」を演奏する楽器があることに気付かせる。次に、それぞれの「リズム」を感じ取って聴くことをねらいとし、体を自由に揺らしたり、図形にかかせたりしながら、細かく繰り返されるリズムとゆったりと流れるリズムを感じ取らせる。そして、このような音楽を形づくっている要素と、自分のイメージとを結びつけ、どんな様子を表現しているのかを想像しながら楽曲を全体的に鑑賞させる。このように、楽曲を聴く観点を「共通事項」で示すとともに、ねらいを焦点化して積み上げられるようにする(図5)。

また、「共通事項」の内容が生み出す音楽の特質や雰囲気を感じさせる活動例として、表2に示すものがある。([共通事項]の内容については、学習指導要領解説音楽科編を参考とした。)



【「聴き方」の例 組曲「動物の謝肉祭」から「白鳥」】

表2

共通事項	内容	児童の活動例	共通事項	内容	児童の活動例
音色	声や楽器などから出すことができる様々な音の表情。	奏法が違うリコーダーの音色を比較して聴く。ミュージカルから男声と女声の歌声を聴き取る。	音階	ある音楽で用いられる基本的な音をおよそ1オクターブ内で高さの順に並べたもの。	「レミソラシ」の5音を使って、リコーダーではおはやしを創作する。
リズム	楽曲全体にわたり安定して繰り返される構造化されたパターン。	祭りばやしを聴き、リズムパターンを見つめる。パターンを組み合わせさせて祭りばやしをつくる。	調	長調と短調の2種類に代表されるもの。中学年で長調を、高学年で短調を学習する。	短調の音階「ラシドレミ」を使ってつくったふしを、長調の音階に平行移動させて違いを感じ取る。
速度	拍の長さのこと。	片方の指一本でもう片方の手の平を拍に合わせて打つなど、速度を示しながら聴く。	和声の響き	調のある音楽での音の重なりとその響き。	I, IV, Vの和音から単音を抽出して歌ったり、分散和音唱をしたりする。
強弱	音量の程度、楽曲の各部分で相対的に感じられる強さ。	楽曲を聴いて強弱の変化を図譜で表す。パートのバランスを意識して合唱や合奏をする。	反復	リズムや旋律が繰り返される反復、合間において繰り返される反復、A-B-Aの三部形式に見られる再現による反復など。	一つの音のパターンを覚え、これを繰り返して旋律を支えている楽曲を聴き、どのように繰り返されているのかを感じ取る。(伴奏の繰り返しの例)
拍の流れ	音楽の拍が一定の時間的感覚で刻まれたり、間隔に伸び縮みが生じたりすること。	範唱や伴奏に合わせてリズム打ち(ひざ・手、ひざ・手・手)をしたり、ステップを踏んだりする。	問いと答え	リズムや旋律が互いに呼応する関係にあること。模倣、合の手、コール&レスポンス。	「山びこ」のように模倣された部分や、「会話」のように応答している部分を見付けながら聴く。
フレーズ	音楽の流れの中で、自然に区切られるまとまり。	音楽の流れや区切りに合わせたコレオグラフィーをつくる。	変化	音楽を特徴付けている要素及び音楽の仕組みの変化をつけて反復すること。	AからBへの変化(速度や強弱など)を感じ取り、手を振ったり歩いたりするなど身体表現をする。
旋律	音がいろいろな高さやリズムをもって連なっていくもの。メロディともいう。	音符を線でつないで旋律線の特徴をつかみ、曲想の変化との関係について確かめる。	音楽の縦と横の関係	音の重なり方を縦、音楽の時間的な流れを横と考え、その縦と横の織りなす関係。	持続する音(ドローン)が音楽全体を支えている楽曲を聴き、伸びている音を手で表す。
音の重なり	複数の高さの音が同時に鳴り響くことによって生まれる縦の関係。	主旋律と副次的な旋律を合わせて歌う。			

6 【共通事項】を基盤とした題材構成の実践例

(1) 研究動機

本題材では、楽器の音色、強弱などの〔共通事項〕を手がかりに自分のイメージをふくらませ、音楽が表している情景を思い浮かべて聴いたり、その楽曲に合う表現をしたりすることをねらいとする。しかし、3年生の段階では、感じ取ったことをうまく言葉に表せず、表現活動へとつながりにくい。そこで、友達の見解や教師の助言を聞き、他とかかわりながら感じ取ったことを楽しく表現できる場を設定する。具体的には、児童が音楽の諸要素を意識するために、コレオグラフィーや、グループ活動を取り入れることにより、音楽の特徴を目に見える形や言葉にして、友達や教師と共有することが有効であると思われる。このような経験を重ねる中で、児童の豊かな感性を引き出すことができるとともに、楽曲の特徴をとらえて表

現する力を高めることにつながると考える。

(2) 検証事項

- ・ 「鑑賞カード」の活用は、音楽の要素や仕組みと、それによって生まれる曲想との関係を考える上で有効かどうか。
- ・ 歌詞の内容に着目して自分の考えと友達のことを比較したり、全体で共有化したりする言語活動やグループ活動は、工夫して表現する力を育てる上で有効かどうか。

(3) 授業の実際と検証

① 題材「様子を思い浮かべて」
(21年度 1月～2月)

② 題材の目標

- 歌詞の内容や音楽が表している情景を思い浮かべながら、聴いたり表現したりすることができるようにする。

③ 児童の活動の様子 (8時間完了)

欄	全体の活動の様子
第1・2時 (感じる)	<p>1 情景やイメージを感じ取りながら、聴いたり表現したりする。</p> <p>(1) 組曲「動物の謝肉祭」から「象」「カンガルー」「かめ」「ライオンの行進」を、曲名をふせて鑑賞する。登場する動物をイメージしながら聴き、教師が提示した「音楽のひみつカード」(「音色」「強弱」「リズム」「速度」)をもとに、その動物を選んだ理由を考えて鑑賞カードに記入する【活動エ】。</p> <p>(2) ピアノとチェロの音色に着目して、情景を想像しながら「白鳥」を聴き、それぞれの楽器が表す様子を鑑賞カードに記入する【活動エ】。</p> <p>(3) 旋律の流れを生かした「白鳥」のコレオグラフィーを考え【活動エ】、グループで工夫した表現を発表する【活動アイウ】。</p> <div data-bbox="191 1142 861 1411"> <p>【児童Aの「鑑賞カード」】</p> </div> <div data-bbox="877 1142 1436 1478"> </div>
第3・4時 (広げる)	<p>2 歌詞の内容を生かして、表現を工夫して歌う。</p> <p>(1) 「大きな古時計」の範唱を聴き、楽曲の流れや特徴をつかんで歌う。</p> <p>(2) 歌詞が表す気持ちを想像しながら、①歌詞を音読する、②歌詞カードに、歌詞の内容から伝わる気持ちを書き込む、③自分の考えを理由とともに発表する、という流れで、どのように歌うと相手に気持ちが伝わるかを考える。思いを生かした歌い方を「強弱」「速度」「音色」に着目してグループで工夫する【活動アイウ】。</p> <div data-bbox="207 1702 590 1971"> <p>【児童の考えをまとめた拡大歌詞】</p> </div> <div data-bbox="606 1702 1005 1971"> </div> <div data-bbox="1021 1702 1436 1971"> <p>【グループ練習の様子】</p> </div> <p>(3) グループで工夫した表現を発表し合い、よさを認めたり、気付いたことをアドバイスしたりする【活動アイ】。</p>

3 曲想の「変化」や楽器の「音色」から、様子を感じ取って聴いたり、情景に合う音の組み合わせや表現を工夫して、音楽をつくったりする。

- (1) 森の情景がどのように表現されているかを感じ取りながら、「森ひばり」「森の水車」を聴く【活動エ】。各楽器の音色や表現の仕方と関連付けながら、森のイメージについて話し合う。
- (2) 森の情景やイメージに合う音を見つけて、音の出し方や組み合わせ、演奏の仕方をグループで考え、「森の音楽」をつくる【活動アイウ】。
- (3) 工夫した表現を発表し合い、みんなでつくり上げたよさや楽しさを味わう【活動アイ】。

曲名「森ひばり」
★ 森の様子 <small>木々のしずかな所で鳥がきれいな声でないといふ木葉子だと思いました。</small>
★ その理由 <small>しずかじリズムが速くて音色が音がなかな</small>
曲名「森の水車」
★ 森の様子 <small>川が流れて水車がまわって水がこぼれてくる木葉子だと思いました。</small>
★ その理由 <small>ゆたかでの音が耳に響く木葉子だと思いました。</small>

【児童Bの「鑑賞カード」】



【森のイメージについて話し合う様子】

① 森の音楽を発表で、3はんのえんそうが音色がきれいでさいごのおわりかたがゆくりたんだん弱くしていきのがきれいだ。② 音楽をつくる練習のときよくあわせられたね」といってくれうれしかった。

【児童Cの「鑑賞カード」】

④ 実践の考察

鑑賞カードは、曲の番号と選んだ動物の写真を線で結ばせるとともに、提示された「音楽のひみつカード」の「音色」「強弱」「リズム」「速度」を手がかりに、その動物を選んだ理由を考えて記述させた。それによって多くの児童が、楽しみながら楽曲の特徴と音楽の要素とを結びつけて鑑賞することができ、曲の雰囲気の違いと、音楽の要素のかかわりに気付くことができた。

第4時では、「大きな古時計」の歌詞の音読から、歌詞から伝わる気持ちを考え話し合う場を設定した。児童の発言をキーワード化して付箋紙に書いていくことは、児童の考えを集約するのに役立った。また、グループ練習では、「もう少しゆっくりした方がいい」「ここは悲しいところだから弱くしたい」「声の感じを変えよう」など、音楽の要素の「速度」「強弱」「音色」を意識して練習する様子が見られた。これは、言語活動において、表現に対する「こう歌いたい」という自分の思いをはっきりともつことができたことと、さらに互いの思いを共有することができたためだと思われる。グループ練習や発表では、全てアカペラで行ったが、それが互いに集中して声を聴き合ったり、歌い出しや速度の変化の合図を出す児童を決めたりすることにつながった。

下のように、授業日記からは、本題材で取り上げた〔共通事項〕や、グループ練習の中での言葉

についての記述が多かった。このことから、〔共通事項〕を示した鑑賞活動や、言語活動は、音楽の要素や仕組みと、それによって生まれる曲想との関係を考える力を育てたり、歌詞の内容に着目して工夫して表現する力を育てたりする上で有効であると考えられる。

- 「白鳥」のフレーズを体でひょうげんすることができた。先生がフレーズの切れるところで「ここ！」とさいしょいってくれたから、「白鳥」のフレーズのきれめが分かった！（第2時）
- 悲しいところ、楽しいところの声を少しかえて歌うと、歌の中のものがたりが分かる。（第4時）
- 「いっせーの一で」と声をかけてあわせることができた！みんなとそうだんして、さいごはゆっくりにしてみたらうまくできた。（第6時）

【本題材の授業日記より】

7 ハーモニー感を育てる段階的な歌唱指導

(1) 研究動機

4年生は体つきもしっかりとしてきて歌声も伸びる時期である。伸びのある声をつくるためには、姿勢・呼吸・共鳴・発音などの技術的な指導も大切にしていきたい。しかし、単にこれらを取り出し技術指導をするのではなく、まず、みんなで声を出し、合わせたり重ねたりする活動を通して歌う楽しさを味わわせながら、「こんなふうに歌いたい」というよりよく表現しようとする意欲

を喚起させたい。その中で、周りの声や他パートの声を「聴く」活動を多く取り入れ、自分の声の出し方を考えたり、曲に合った歌い方を工夫して表現したりする楽しさを体験させたい。「美しく豊かな合唱」を実現させるためには、声づくりからハーモニーづくりなど、様々なスモールステップを重ねる必要がある。本題材では、4年生の発達段階に合う、二部合唱にむけての段階的な指導について検証したい。

(2) 検証事項

- ・ 歌唱表現におけるスモールステップは、ねらいにそった表現力を育てるのに有効かどうか。
- ・ 振り返りポイントやアドバイスコーナーなど教師の助言が示された学習カードは、録音やグループ練習で自分たちの表現を聴き、さらによりよい表現へとつなげるのに有効かどうか。

(3) 授業の実際と検証

① 題材「歌うの大すき」

(22年度 4月～5月)

② 題材の目標

- 様子を思い浮かべ、楽曲の特徴を感じ取って聴いたり、明るくのびやかな声で楽しく歌ったりすることができる。

③ 本題材で活用した手だて

○ 和音唱

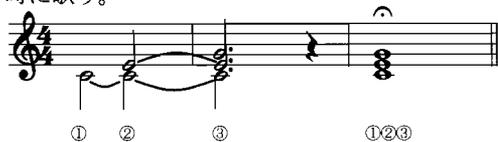
I, IV, Vの和音から単音を抽出して歌ったり、分散和音唱をしたりする。

- 1 教師がひくピアノの音（ドミソ）を聴いて、最後の「ドー」を出す。



(ド) (ミ) (ソ) ドー

- 2 全体を①②③のパートに分け、①のパートから順に歌う。休符で一度区切り、次に①②③同時に歌う。



【Iの和音唱の例】

○ パートナーソング

全体を2つに分け、「夕やけこやけ」と「どんぐりころころ」、「春が来た」と「雪やこんこん」を1曲ずつ選択して練習させる。次に2曲を同時に歌い、旋律の重なりのおもしろさやフレーズのまとまりが似ているところや違うところに気付かせる。

○ 腹式呼吸の練習

お腹に手をあてさせ、腹式呼吸は息を吸うとお腹がふくらみ、息を吐くとお腹がへこむということを確認させる。息を全部吐くことで、自然と息が入ってくるという感覚をつかませる。

【練習方法の例】

- ★ おなかに手をあてて、全ての息を全部吐ききりましょう。
- ① 2秒止めます。
- ② いいにおいをかぐように、鼻から4秒間で息を吸います。
- ③ 2秒止めます。
- ④ 8秒間で息を吐きましょう。
- ⑤ 2秒止めます。
- ⑥ 4秒間で残りの空気も全部出しましょう。(①～⑥を繰り返す)

○ 「ア」母音唱

母音の響きを意識して歌わせるために、歌詞の○部分の口形が縦開きの時と、横開きの時の声の出し方を試させ、「ア」の響きの違いを確認させる。「ア」母音は下あごが落ちやすいので、縦開き（口の中の天井を高く）にして練習させる。

さくら さくら

日本古謡

【掲示する楽譜】

○ サイレント・シンキング

伴奏と範唱を聴き、声を出さずに心（頭の中）で歌う。「サイレント・シンキング」と「声に出して歌う」を繰り返すことで音程を覚えさせる。本題材では、アルトパートの音を確認するときに取り入れる。

○ 学習カード

振り返りポイントやアドバイスコーナーとして、教師の助言を示しておく。

- ☆口の形→たて開きになっているか。きちんとあいているか。
- ☆しせい→両足に重心がかかっているか。視線は下を向いていないか。
- ★どなっている→たて開きの口にする。首やかたの力をぬこう。
- ★リズムが正しくとれていない→ひょうしをたたいてあげよう。
- ★高い声が出ない→あごをひいて、目を大きくあげよう。

【「アドバイスコーナー」の一部】

④ 児童の活動の様子（8時間完了）

時間	学習活動	指導上の留意点
第1～3時 (感) (あ)	<p>1 声の重なりに関心を持ち、呼吸や声の出し方に気を付けて歌う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 和音唱 活動ア・イ ○ パートナーソング 活動ア・イ <ul style="list-style-type: none"> ・「夕やけこやけ」と「どんぐりころころ」 ・「春が来た」と「雪やこんこん」 ○ 腹式呼吸の練習 ○ 「ア」母音唱 活動ア <ul style="list-style-type: none"> ・「さくら さくら」 ○ サイレント シンキング 活動ア・イ <ul style="list-style-type: none"> ・「COSMOS」 	<ul style="list-style-type: none"> ○ オルガンの音や、教師の声をよく聴き、声を出す前に音程を合わせておくことを体得させる。 ○ 怒鳴り声にならないように、相手のグループの声をよく聴き、声の重なりを意識して歌わせる。フレーズのまとまりがよく似た曲であることを確認させる。 ○ お腹に手をあてさせ、息を吸うとお腹がふくらみ、息を吐くとお腹がへこむということを確認させる。 ○ 耳の前に手を当て、顎骨間接のところのくぼみが広がるかを確認させながら、あくびのようにのどを開けた状態で歌わせる。2人組になって、向かい合って口形を確認させながら歌わせる。 ○ 声に出さずに心の中で歌うことを確認し、静かにアルトのメロディーを聴かせる。
第4～6時 (広) (か)	<p>2 曲想を生かし、発音や発声に気を付けて歌い方を工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 和音唱 活動ア・イ ・ ペア練習、グループ練習 活動ウ 「COSMOS」 ・ 学習プリントの活用 ・ 中間発表（相互評価） 活動ア・イ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループで発音や発声、強弱を観点に、歌ったり聴き合ったりする活動を繰り返し、曲想に合った歌い方を工夫させる。 ○ 発音や発声、強弱を観点に互いの発表を聴き、よかったことや気付いたことを学習カードに記述させる。
第7・8時 (深) (き)	<p>3 声の美しさや曲想を感じ取って聴いたり歌ったりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 録音での振り返り 活動ア ・ グループ練習（学習カードの活用） ・ 合唱表現 活動ウ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習カードの「アドバイスコナー」を参考にして、互いに表現を試し、気付いたことを伝え合う場を設けるよう声をかける。 ○ グループでの練習を生かし、発音や発声、曲の山を意識して、伸び伸びと歌わせる。

⑤ 実践の考察

お腹を触ったり、「ア」母音唱で顎骨間接を触ったり、向かい合って口形を確認したりするなど、技能習得の場面で身体の活動を取り入れながら具体的に体得させたことは、次時の評価ポイントにつなげるためにも大変有効であった。また、このような場面では、個別にほめる場面や、少人数で試し評価する場面を設定し、「何となくできた」ではなく、「ここまでできた」「これができるようになった」という思いをもたせ、次へつなげていくことが大切である。活動のまとまりの瞬間に対するほめ言葉や評価をたくさん入れることで、活動の中で子どもたちが成就感や達成感を味わうことができ、ステップアップする次の活動につなげることができた。

腹式呼吸の練習では、初め息を吸うとお腹がへこみ、息を吐くとお腹がふくらむ児童が多かった。「肩があがらないように」という助言や、児童Dの「風船がふくらんだり、空気がぬけた

りするみたいだね」という言葉によって、できるようになった児童が増えた。

ペア練習では、相手の耳の前を触って口の開きを確認、「ちゃんと動いているよ」と声を掛けたり、フレーズごとに「口がよく開いていたよ」とOKのサインを送ったりさせた。授業日記には、「初めは相手に向かって歌うのがはずかしかったけれど、OKと言われてうれしかった」という記述や、教師の「今度は先生に聴かせてみて」という呼び掛けに対して伸び伸びと歌う姿から、聴いてもらう対象がはっきりすると歌う意欲が高まっていく様子を感じられた。

サイレント・シンキングは、児童は集中して音を聴くことができ、新しいパートの音程を覚えるのに有効であった。音を聴いていくうちに、「ソプラノとタイミングが違う」「リズムが違う」「入るところが違う」などのパートの違いにも気付くことができた。また、「最後がよく分からないから、次はそこをよく聴こう」「もっとや

りたい」などという声が聞かれるなど、意欲的に取り組むことができた。

グループ練習では、活動に入る前に、全体練習の中で、パートごとにどこが課題となっているのか、どのように練習すると効果的かなど、教師が習得の仕方を提示した。これは、子どもたちが課題を明確にもってパート練習をすることにつながった。また、具体的なアドバイスの例(学習プリントの「アドバイスコーナー」)を提示したため、互いにいろいろな言葉かけをすることができていた。初めはほとんど口が動かなかった児童Eや児童Fも、友達のアドバイスを聴いたり、一緒に歌ってもらったりしたことで、授業の最後に歌ったときには、口をしっかりと開けて表現するなどの変容が見られた。

8 【共通事項】に着目して分析的に聴く活動

(1) 研究動機

本題材では、[共通事項]の一つである拍の流れを感じ取って、ふしのまとまりを生かして表現することをねらいとしている。拍子の違いを感じ取るためには、たくさんの身体反応をすることが必要ある。そこで2拍子・3拍子・4拍子の様々な曲を取り上げ、手拍子や指揮などの身体表現を取り入れながら演奏したり鑑賞したりすることを通して、拍子や拍の流れを感じ取らせたい。

(2) 検証事項

手拍子や指揮などの身体表現は、拍子の違いを

【資料1】

時間	学習活動	指導上の留意点
5分	1 本時の学習課題をとらえる。 (1)「ラバースコンチェルト」と「メヌエット」を聴く。 活動エ	○ リズム譜を参考にひざ打ちや手拍子をしたり、体を揺らしたりして聴かせ、何が違うかを感じ取らせるようにする。 ○ 4拍子や3拍子の拍の流れの違いを感じ取りながら活動するよう助言する。
20分	(2)本時の学習課題をとらえる。 拍子のちがいを感知取ろう 2 4拍子と3拍子の拍の流れを感じ取る。 (1)「ラバースコンチェルト」の範唱を聴いて歌詞唱する。 活動イ (2)「ラバースコンチェルト」を手拍子(ひざー手ー手ー手)したり、指揮をしたりしながら楽しく歌う。 活動ア・イ・ウ	
15分	(3)「メヌエット」を手拍子(ひざー手ー手)したり、指揮をしたりしながら聴く。 活動エ 3 拍子の違いを感じ取る。 (1)楽曲を何曲か聴き、何拍子の曲か学習カードに記入する。 活動エ 「さんぽ」4拍子 「マンガニ 雨とおどろろ」3拍子 など	○ 拡大譜を提示し、4拍子の拍の流れを感じながら、範唱を聴いて歌うよう呼びかける。 ○ 4拍子のリズム譜を提示し、拍子に合わせてどの拍で体が揺れるかを意識しながら表現するよう呼びかける。 ★ 拍の流れやリズムを意識していない子どもには、拍の流れにのった自然な身体反応を見せた子どもや、手拍子ができた子どもに注目させ、4拍子を意識できるようにする。 ○ 3拍子のリズム譜を提示し、拍子に合わせてどの拍で体が揺れるかを意識しながら表現するよう呼びかける。
5分	(2)4拍子と3拍子では、何拍目で体が揺れるか発表する。 4 本時のまとめをする。 (1)拍子の違いを感じ取りながら、「エーデルワイス」と「ラバースコンチェルト」を歌う。 活動ア・イ・ウ (2)授業日記に本時の学びを記入する。	○ 1拍目を意識して表現することを確認する。 ○ 4拍子と3拍子の違いや1拍目を意識して歌うよう呼びかける。

感じ取って聴いたり表現したりするのに有効かどうか。

(3) 授業の実際と検証

① 題材 「ふしとリズム」

(22年度 6月～7月)

② 題材の目標

○ 旋律や拍子の特徴を感じ取って聴いたり表現したりできるようにする。

③ 指導計画(本時4/9)【資料1】

④ 実践の考察

拍子の違いを感じ取る活動では、ほとんどの児童が4拍子と3拍子の曲を正しく聴き分けることができた。本実践から、指揮をしたり手拍子をしたりするなど、身体表現をしながら分析的に楽曲を聴き分けることは共通事項(拍子、拍の流れ)に着目して聴く上で有効であることが分かった。

第7時の2拍子の特徴を感じ取る場面では、行進の「1・2」の号令を想起するなど、自分の生活体験に基づいて説明をする児童がいた。それによって、2拍子の特徴について「行進の1・2と同じ」「1・2の1の方が強い」など、他の児童も自分の言葉で説明ができた。また、「美中の美」の拍の流れを感じ取りながら聴く場面では、「4拍子かな?」「でも足踏みをすると2拍子の方が合うよ」「4拍子では合わないね」「太鼓の『ドン』に合わせて拍子が分かりやすい」といった言葉が聞かれ、2拍子の特徴を自分で理解した上で思考・判断し、体験を基に説明をすることができた。

9 まとめ

(1) 仮説の検証

本研究では、下記の仮説を設定し、実践を中心とした研究を行ってきた。

音楽の要素や仕組みを感じ取ったり、聴き取ったりする活動や、各領域に言語活動を取り入れた授業を構成することで、豊かな音楽性と表現力を育むことができるだろう。

音楽を特徴付けている要素や仕組みを、「音楽のひみつカード」としてキーワード化したり、聴き取る観点として焦点化させたりしたことで、題材を通して意識することができた児童が増えた。それは、児童の発言やかかわり合いの中で、〔共通事項〕で示される音楽の要素や仕組みの言葉が聞かれるようになったことから分かる。楽曲の雰囲気や思い浮かぶイメージを、「強弱」「リズム」「速さ」などの音楽の言葉を使ってその理由が説明できるようになってきた。しかし、児童にとって、言葉だけでは理解しにくかったり、とらえ方にズレが出てきたりする場合がある。そのため、小学校段階では、児童の言葉や音楽の指導言語を、身体表現に置き換えることで補うことがとても大切である。手を動かす、お腹を触る、足踏みをするなどの体験をともなった表現が必要であり、これらの実感的な活動を通して知識として習得したことが、活用されていくことが分かった。

歌唱指導では、和音唱を毎回の授業で帯の活動として取り入れることで、音の重なりや響きを体得できるようにした。また、技能習得場面では、「肩が上下しないように、お腹を触って動きを確かめながら歌う」「額の前にかざした手を、音の高低に合わせて上下させながら、全身で声ののせ方をイメージして歌う」「眉や目、ほおを引き上げるようにさせ、表情に気を付けて歌う」などの身体の活動を大切にし、消えるもの（音）を体の中に残していくことが有効であった。

(2) おわりに

本研究では、音楽の諸要素を聴き取り、表現に生かすことができるように、〔共通事項〕を生かした実践を行ってきた。その結果、「この曲のおもしろさやよさを伝えたい」「こんな気持ちをこめて歌いたい」という児童の思いや願いを表現するために、伝えたい音楽の魅力の根拠である、要素や仕組みを発見し、そのかかわり合いや働きを感じ取りながら表現を深めることが音楽科の学びであると改めて分かった。来年度からの新学習指導要領完全実施にむけて、さらに、〔共通事項〕を生かした指導計画や具体的な活動例について、実践を通じた研究を継続していきたい。

付記

教職大学院でこのような研修の機会を与えてくださった、名古屋市教育委員会にお礼を申し上げるとともに、勤務校の前校長林雅彦先生、現校長山内裕治先生をはじめ教職員の皆様には、研修にご理解、ご協力をいただき、大変感謝しております。この教職大学院で学び得たことを、少しでも現場に還元できるように努力していきたいと思えます。

また、課題実践研究の計画を進めるにあたり、ご指導をいただきました愛知教育大学教職大学院の志水廣教授、中妻雅彦准教授、本学音楽科の新山王政和教授をはじめ、諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

主な参考文献

- ① 学習指導要領等
 - ・小学校学習指導要領（文部科学省 2008.3）
 - ・小学校学習指導要領解説 音楽編（文部科学省 2008.9）
 - ・中学校学習指導要領解説 音楽編（文部科学省 2008.9）
- ② 音楽科教育等の専門的、実践的文献
 - ・内田有一：音楽の読解力を育てる言語活動の授業 聴いて考え 表現しよう（星雲社 2009）
 - ・金本正武・坪能由紀子：小学校新学習指導要領ポイントと授業づくり（東洋館出版社 2009）
 - ・小島律子：小学校音楽科の学習指導 一生成の原理による授業デザイン（廣済堂あかつき 2009）
 - ・佐藤日呂志・坪能由紀子：小学校新学習指導要領の展開 音楽科編（明治図書 2009）
 - ・竹内秀男：段階的な合唱指導（教育出版 2004）
 - ・竹内秀男：美しいハーモニーを求めて（教育芸術社 2000）
 - ・竹内秀男：心に響く合唱指導（教育芸術社 1988）
 - ・田畑八郎：音楽表現の教育学 一音で思考する音楽科教育一（Kmp 2004）
 - ・〔共通事項〕を生かした年間指導計画（教育音楽小学版 2009.3 音楽之友社）
 - ・歌唱指導の言葉がけ（教育音楽小学版 2009.7 音楽之友社）
- ③ 実践にあたって
 - ・志水廣：算数力がつく教え方ガイドブック（明治図書 2007）
 - ・志水廣・志水塾運営委員会：授業力アップ志水塾ハンドブック ○つけ法・復唱法の理論と実技研修（for next）
 - ・新山王政和・中野直幸：イメージングを手掛かりに生徒の主體的聴取をめざした「能動型鑑賞授業」の模索（愛知教育大学研究報告 第56輯 2007.3）
 - ・新山王政和・菅野裕子：聴取の意識を「音の羅列から意味のある音の結びつき」へ転換させる能動型鑑賞活動への試み（愛知教育大学研究報告 第57輯 2008.3）
 - ・新山王政和・菅野裕子・中野直幸：音楽の諸要素へ耳を傾け、それを聴き取る音楽活動の試み（愛知教育大学教育実践総合センター紀要第12号 2009.2）
 - ・新山王政和・木村愛・平木順子：音楽の諸要素へ耳を傾け、根拠や理由を付して考え、それを他者と共有する音楽活動（愛知教育大学研究報告 第58輯 2009.3）
 - ・愛知教育大学附属名古屋小学校 研究紀要（2009.6）
 - ・愛知教育大学附属名古屋中学校 研究紀要（2010.10）